孤独な愛され女王蜂　１

孤独な愛され女王蜂　1

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19413485

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ヨシ霊, ♡喘ぎ, モブ霊, オメガバース, もぶお兄さん×霊幻, モ腐サイコ小説50users入り

誰得？俺得！なオメガバースパロです。オリジナル設定含みます。ヨシ霊ですがビッチ師匠総受けです。今回は本番はモブ霊です。倫理がまたもやアレ。お好きな方はお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

孤独な愛され女王蜂　1

オメガって得じゃん。
そう思ったのは、中学生の時に、ヒート抑制剤を忘れた俺を襲ったアルファの教師が、成績をオール５にしてくれた時だった。
処女を勝手に散らしてくれたのにはイラっとしたけど、しばらく贈り物をしてくれたりいろんなところに連れて行ってくれたりしたから、割と便利な暇つぶしだった。
でも、『番になって、ゆくゆくは結婚して欲しい』とか言い出したから、距離を置くことにした。俺を奴隷にしようとするヤツはキライだ。
そしたら無理矢理噛もうと襲ってきたんだけど、すでにアルファの彼氏がいた俺は、その彼氏に教師を撃退させた。
オメガってだけですぐ便利なアルファが寄ってくる。
オメガってめちゃくちゃ得だ。

俺本人が愛されることは、無いんだけれど。

※

ここが今の俺の巣、霊とか相談所だ。フェロモンで誘惑した優秀な人材が揃っている、なかなか居心地のいい場所である。
客もちょっとフェロモンを出せば、金払いの良いアルファがハゼみたいに釣れる。
ほんっとオメガって得だわー。
「師匠、今日は僕の番ですよ」
まさかの弟子に番にされるって大誤算はあったけど。

「今日は家族に言ってきてあんの？」
「はい。ですから朝まで大丈夫です」
この会話をエクボや芹沢が複雑な顔で聞いている。こいつらも俺のフェロモンに釣られて相談所を手伝ってるやつらだ。
でも、俺の事が好きなんだと。
はは、笑えるだろ？
オメガはアルファより数が少ないから、アルファは出会ったオメガのフェロモンに脳がやられるのを、恋だと勘違いしがちなんだよ。
実際俺が出会ったアルファ、みんな俺の事を好きだって言ってきたし。
でも俺が「他のアルファとも寝てる」って言うと、酷く傷付いた顔をして（勝手だよな！）、「セフレにして欲しい」って言ってくるから、現金なもんなんだよ。
結局アルファなんて、オメガとセックスできりゃ恋愛感情なんて錯覚だったと気が付いてしまうんだよなぁ。
……の、はずなんだが。
「番だからって影山くんの日だけ泊まりなのずるくないですか？」
「俺たちにも平等にお前を独占させて欲しいもんだがな」
なんとこの２人、俺に番がいる上に他にも便利アルファの彼氏がいるのに、まだガチ恋しているという錯覚から目覚めない、困ったさんなのである。
ま、夢を見る分には害が無いからいいけどさぁ。
お前らいい男なのに、ちょっと人生勿体ないぞ。
「それはそっちで話し合ってください。行きましょう、師匠」
まあ人生損してる筆頭はこの俺の可愛い弟子なんだが……。
俺がオメガだったからって、１４才も上のオッサンをだぞ？恋愛対象と勘違いした上にだぞ？うっかりベッドで言った「俺も愛してる♡」のノリの言葉を間に受けて、番にしちまったモブが哀れで仕方なくて、俺は存分にせめてセックスだけはこの弟子にさせてやっている。
「師匠、またすぐラブホですか？もっと恋人らしいことしたいです」
「俺とお前は付き合って無いからダメ」

俺はこの弟子が大事で仕方ない。だから、早く俺のことは忘れて、可愛い若い女オメガと幸せになって欲しいと思ってる。
他のアルファを誘惑したいのでヒートが来ないと困るから、番の解消はやめて欲しいけど、そもそも俺はモブに番としての義務を果たして欲しいとは思ってないから、ひっそりとモブの前から消えれば済む話だった。
エクボや芹沢の前からも消えられるから、一石三鳥だ。
本当に、アルファなら誰でもいいこの体質には感謝している。
だから俺は待っている。

モブに捨てられる日を。

※

ホテルについて、俺はいつも通りヒート誘発剤を口にする。
数時間で効果が切れる軽いやつだ。普通の医者は不妊治療以外で処方してくれないが、オメガリフレがある新宿の医者なら欲しいって言えば出してくれるから、定期的に通ってる。
ったく、オメガのヒートぐらい好きにさせろっての。アルファが手に入れたら犯罪に〜じゃねぇよ、テメェのオメガがソレ使って浮気したら嫌なだけだろ。ホント政治家がアルファばっかりなのってオメガには不利だよな。
「師匠、そんなの飲まなくてもいいですよ」
風呂から出てきたモブが髪を拭きながら言う。
「いやお前、ヒート起こしてなかったら俺はただの三十路手前のオッサンだぞ？」
お前、勃つわけねーだろ。
そう言うと悲しそうな顔をモブはするから、俺はどうしていいか分

からなくなる。
「準備してくるから、楽しみにしてろよ」
俺はトイレに逃げて、その後シャワーに逃げた。
「はっ、はぁ……っ♡」
そうこうしてるうちにヒートに入ってきた。
「もぶぅ♡きたぁっ♡」
俺は髪を拭くのもそこそこに、ベッドでバスローブ姿で待っていたモブに飛びつく。
「……っ、ししょお……っ」
濃いオメガフェロモンに、モブはその愛らしい顔を歪めて耐える。
「はやくっ♡抱いてぇっ♡」
モブの強烈なアルファフェロモンを浴びて子宮がうずく。じゅん♡とアナルが濡れて、息が本格的に上がってきた。
「ししょう……っ」
がちがちとモブの歯が当たるキスを受ける。へたくそぉっ♡でも気持ちいいっ♡もうあたま、ばかになってるからぁっ♡
「もぶぅっ♡キス気持ちいいっ♡おれキスすきぃっ♡♡♡」
「ししょう、ししょう好きです。愛してます」
「うんっ♡おれもぉっ♡」
だからはやくだいてぇっ♡
アルファだいすきぃっ♡♡♡
「ししょう、僕、本当に、師匠が好きなんです」
ぽた、とモブの目から涙が落ちて少し正気に戻る。
「どうしたら信じてくれますか。どうしたら僕と付き合ってくれるんですか」
「うーん……っ♡モブが、アルファじゃ無くなったら、かなぁっ、っん♡」
そんな方法は無い。
モブの顔に絶望が広がる。
「そんなことよりっ♡はやくだいてくれよぉっ♡」
「……はい」
涙声のモブが、コンドームをつけて俺に侵入してくる。
「きたきたきたぁっ♡アルファちんぽさいこおっ♡♡もっとっ♡お

くっ♡までぇっ♡♡」
ああああたまばかになるうっ♡
あるふぁちんぽさいこうっ♡
もっとずぼずぼしてぇっ♡♡♡
「気持ちいいですか、師匠」
もぶがっ♡ほっぺたなでてきてっ♡なんかきゅんきゅんするっ♡♡
「うんっ♡♡きもちいっ♡♡あ、あ、あ、あぁ……っ♡♡」
ヤバいっ♡ぞくぞくしてきたぁっ♡イくっ♡イっちゃうっ♡♡
「ししょう、入り口がひくひくしてきましたね」
「うんっ♡イくっ♡イくイくイくぅっ♡♡♡あぁあああぁあ──っ♡♡♡」
♡♡♡♡
じ……ん、じん、して……っ♡
し、ぬぅ……♡♡♡
「……っぅ」
あ……っ♡
なかで、どくどく、いってる……♡
「もぶぅ……♡すきぃ……♡」
ぎゅって♡してくれる♡
もぶ、すきぃ……♡

その日は、朝までモブは泣きそうな顔で、俺を抱いていた。

※

今日は芹沢の日だったかな、あいつ夜学終わったら何処で待ち合わせるのか言って無かったよな。メールしないと。
そんなことを思いながら歩いていると、タバコを咥えたアルファに道を塞がれた。
不審に思って顔を見て、息を呑む。

「すっげえ」
思わず心からの驚きが漏れる。
「運命の番って、本当に居るんだな」
「……あ？」
その目つきの悪いアルファは、さらに目つきを悪くしながら俺を睨んできた。

それが俺の「運命」との出会いだった。

続